（様式2）

平成３０年度　自己評価表（中間評価）

鳥取県立鳥取養護学校

中長期目標（学校ビジョン）	自立と社会参加をめざし、より豊かに生きる力を育む学校	今年度の重点目標	1　学習指導・授業改善に努める【授業実践の充実】 2　保護者や地域の期待と願いに応える【自立と社会参加】 3　児童生徒の健康と安全を守る【ＱＯＬの向上】 4　センター的機能を推進する【チーム鳥養の推進】

年度		当初			（　１０　）月		
評価項目		評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	到達状況	評価	改善策
1　学習指導・授業改善に努める【授業実践の充実】	小学部	○ 自分らしさを発揮し、意欲的に学ぶ授業づくり	○ 各クラスが、児童の興味関心や発達段階を考慮した授業づくりに取り組んでいるが、クラスごとの取り組みでとどまっている。他のクラスの指導に関して、情報交換する機会が少ない。	○ 実践した授業を複数の教職員で評価し、子どもたちが意欲的に学ぶ授業改善が行われている。	○ 子どもを語る会の中で授業づくりについての意見交換を年１０回実施する。 ○ 実践した授業の写真やビデオを複数の教職員で見合い、授業改善に関する話し合いを年５回実施する。 ○ 教職員アンケートをとり、目標達成度を評価する。	○ 子どもを語る会の中で授業づくりについての意見交換を３回実施した。小グループでの話し合いを通して、授業改善についての意見交換をすることができた。 ○ 実践した授業のビデオを複数の教職員で見合い、授業改善に関する話し合いを２回実施した。児童の実態や支援について、意見交換をすることができた。	B	○ 効率よく話し合うことができるよう、授業を語る会やビデオを見合う会の設定時期や内容を見直す。 ○ 実践につながるアイディアを出すことができるよう、話し合いの方法を工夫する。
	中学部	○ 一人一人の課題や教育的ニーズに応じた授業づくり	○ わかりやすい授業づくりに取り組んでいるが、教科によって難しさもある。（単一） ○ 授業づくりにおいて専門性がいかされていない。（重複）	○ わかりやすい授業づくりがなされ、生徒が意欲的に学習に取り組んでいる。（単一） ○ 単元ごとに学習の振り返りができ、授業改善が行われている。（重複）	○ 単一会で学習についての工夫について話し合う機会を年3回持つ。（単一障がい学級）	○ 単一会・重複会で、授業のポイントの共通理解を図った。勉強会は計画的にできている。 ○ ワークシート、テストの内容、発問の内容など個々の生徒に対する支援が足りない場面がある。（単一） ○ 授業後の改善の意識が少しずつできつつある。放課後良いところを伝えあい、改善すべきところは話し合うことができている。学習の履歴として、使用した絵本や教材を残している定期的に工夫した教材やクラスでの取り組みを共有する会を設けている。 ○ 単元間のつながりを意識して授業作りをしたり、内容によっては、グループ間で交流したりすることができた。 ○ 学習のチーフに任せていたところが改善され、グループで事前の教材研究・教材教具の準備をし、事後の振り返りの時間を設けることでより生徒の実態に合った工夫をすることができつつある。	B	○ 情報交換を図り、チームとして一人の生徒を支援していくという体制を確認する。各教科ワークシート、テスト内容の見直しを行う。　（単一） ○ グループ学習では、学習の準備段階で話し合う機会を持ち、みんなで授業を作る体制にしていく。（重複） ○ 学びの履歴の残し方を整理する。（ワークシート、年計の記入の工夫）
	高等部	○ 様々な人との関わりの中で表出・表現力と課題解決力を高める授業づくり	○ それぞれの担任が一人一人の実態や障がいの特性に合った授業実践に取り組んではいるが、全体の共通理解としては不十分である。	○ 各コース・グループ等で関わる生徒に対しての共通理解のもと、授業改善が行われている。	○ 普段から教員同士の話しやすい雰囲気づくりを心がけたり、単一・生活ふれあいの会や子どもを語る会等を利用して、グループごとに生徒や授業について話し合える場を設ける。	○ 日々の実戦につながるミニ研修会や授業について話し合う時間を設けることで、生徒の現状についての共通理解をし、授業改善につなげることができつつある。	B	○ 現在取り組みを大切に、引き続きミニ研修会の機会を設けたり生徒指導、指導の改善、工夫について話し合う機会をもつ。 ○ 発達障がいの生徒についての指導・支援について学ぶ機会を設けていく。 ○ 単一会、生活ふれあいの会等の情報共有ができるように、必要な内容は記録し、回覧する。
	教務部	○ 新学習指導要領への移行に向けた年間指導計画の整備	○ 新学習指導要領に示されている各教科等の内容や見方、考え方についての共通理解が必要 ○ 年間指導計画は現行の教科等の内容で作成している。	○ 年間指導計画や個別の指導計画に新学習指導要領の内容が明示・反映されている。	○ 年３回開催予定の教科・領域の会等で、新学習指導要領の ○ 新しい見方・考え方についての共通理解をはかる。 年間指導計画作成時及び点検時などに、グループごとに新学習指導要領の内容と照らし合わせ修正する。	○ 教科・領域の会を２回実施。単一教科グループ、重複Ⅰ型グループについては新学習指導要領改訂のポイントについて共通理解を図った。 ○ 年間指導計画の点検時に目標と内容、評価の整合性について検証を行ったが、修正については未実施。新学習指導要領の内容を意識し、次年度の計画を作成する予定。	C	○ 今年度中にあと２回実施し、共通理解を深める。 ○ 今年度の計画と新学習指導要領の内容を照らし合わせ、確認しながら次年度の計画をグループごとに作成する。
	研究研修部	○ 自立に向けた教育的ニーズに応える授業づくり	○ 発達段階に応じた目標設定や具体的な目標設定をすることの大切さが理解されてきている。 ○ 評価の基準の設定や評価方法について、曖昧な部分が見られる。	○ 一人一授業の実践の中で、個々の教育的ニーズを踏まえた目標設定による授業と、目標に準拠した評価を行っている。（目標値８０％以上）	○「とりようの『まなび』」を用いて整理した教育的ニーズに基づいて目標設定を行うとともに、評価基準を設けて評価を行う。	○ 各研究グループでICF関連図を用いた検討を行い、「とりようの『まなび』」にそって教育的ニーズを整理している。教育的ニーズをふまえた目標設定となっているか、評価をどのように行うかという話し合いが始まっており、取り組みへの意識が高まっている。一人一授業の取り組みも始まったところである。	C	○ グループ研究会を活用し、一人一授業の取り組みを通して、目標設定や評価基準についての検討を充実させる。
	情報教育部	○ ICTを活用した授業実践の推進と充実	○ ICTの利活用、授業実践は増えてきているが、児童生徒の変容がわかるまで長期に取り組んだ実践の報告が少ない。 情報モラルの指導力向上に取り組む必要がある。	○ 授業及び活動の中でICTを効果的に利活用している。 ○ 児童生徒の実態に応じた情報モラルについて適切に指導が行われている。（目標値８０％以上）	○ 教職員が児童生徒の実態に応じたICT活用が行えるように、関係機関等と連携した研修会を行う。 ○ 学習保障事業（オリヒメ）を推進する。	○ ICT支援員と連携し、情報モラルの指導に関する研修会を実施した。また、ICT機器の使用方法、活用方法について機会をとらえて、発信するよう努めた。 ○ 学習事業保障事業（オリヒメ）では、県、関係機関と連携しながら継続した実践に努めている。	C	○ 教職員が児童生徒の実態に応じたICT活用が行えるように、関係機関等と連携した研修会を行う。 ○ 学習保障事業（オリヒメ）を推進する。
2　保護者や地域の期待と願いに応える【自立と社会参加】	小学部	○ 保護者や関係機関と連携した指導支援の充実	○ 外部機関の助言や児童の支援に関する保護者からの情報を日々の指導にいかしているが、助言された内容を活用できなかったり、情報が整理されていないため聞き取った情報を支援に反映していなかったりすることがある。	○ 外部機関の助言や児童の支援に関する保護者からの情報を日々の指導にいかしている。	○ 外部機関の助言や保護者からの情報を教育支援計画のシートに記録する。 ○ 教職員にアンケートをとり、目標達成度を評価する。	○ 多くの担任が、指導を受けた内容の記録をしていた。 ○ どの程度、どのような内容を記録するのか、確認できていない。 ○ 指導を受けたことをどのうように実践にいかすか、共通理解を図ることが必要だと感じている。	B	○ 指導を受けた内容の記録について、学部内で共通理解を図る機会を設定する。 ○ 指導を受けた内容が実際の指導にいかされているか学部会の中で検討する。
	中学部	○ 自己実現に向けた指導・支援を行うための連携の在り方	○ 施設利用体験説明会で、キャリア教育部の協力を得て保護者同士が情報交換できる場を設け、保護者の思いや願いを聞き取り、施設利用体験の目的などを見直した。 ○ 個々のニーズに合った、職場体験、実習を計画しているが、現在および卒業後の生活の場が限られている。	○ 個のニーズを把握して最新の情報が収集できるよう校内の人材を活用し、年２回学部会などで情報交換ができている。 ○　保護者それぞれが持つ情報を相互に交換できるように、関係機関利用期間（仮）の前に情報交換会を開催している。	○ 単一障がい学級では、進路情報を知り、自己の適性を把握して、自ら進路を選択する力を身につける支援を総合的な学習、学活、自立活動の中に明確に位置づける。 ○ 教職員にアンケートをとり、目標達成度を評価する。	○ キャリア教育懇談会で保護者同士が進路について情報交換する機会が持つことができた。一人一人のニーズについては、担任や主事から支援部につなぎ、外部機関とつながりを持つことができた事例が増えつつある。 ○ 生徒は学校生活には慣れ、身近な学校環境に適応できているが、中学部を卒業する姿、将来の自分の姿は、まだ、イメージできない。（単一）	C	○ 自己の適正・関心を把握するとともに、進路情報について学ぶ機会を持ち、自ら進路選択していく力を育成する。（単一） ○ 関係機関利用期間を機会に現在の生活や卒業後の生活について本人、保護者のニーズを聞きき取り、校内資源を活用するとともに必要な機関につなげる。（重複） ○ 学部会などで福祉機関や関係機関についての情報交換をする機会を持つ。
	高等部	○ 確かな進路実現に向けての支援体制づくり	○ 高等部卒業後の進路として生活介護から一般就労、進学等多様であり、それぞれの進路に応じた支援が必要である。	○ それぞれの進路に応じた支援が適切に行われている。	○ 本人や保護者の進路に関する希望を元に、具体的な計画やスケジュールを立てて進路担当教員とも連携しながら実現へ向けての支援を進めていく。	○ 本人や保護者の思いを聞きながら、進路実現に向けての体験学習、職場見学を進めている。 ○ 進路に関する情報について、教員が十分に把握しきれてはいない実態がある。	B	○ 進路に関する情報や生徒の課題について、話し合う機会を設ける。 ○ 体験を通じて出てきた課題を、日頃の指導に生かしていく。
	文化部	○ 一人一人の学びや力が発揮できるとりようわくわくフェスタの充実	○ 発表会のねらいや意義が少しずつ浸透してきている。 ○ 午後からの参加率が低い。 ○ 担当者に負担がかかっている。	○ 一人一人の学習の積み重ねや良さが引き出され、充実した発表会であったと7割以上の人が感じている。	○ 一人一人の良さが引き出されるような発表内容やグループの検討。 ○ 担当者の役割を明確にし、仕事量を分散するとともに、各学部で連携が取れるようにする。 ○ 保護者、教職員にアンケートを実施し、取り組みの評価を行う。	○ 担当者や学部会等で進行状況を報告し、学部間で連携を取りながら、フェスタに向けて進行中である。	B	○ それぞれが担当することを早めに立案し、計画に沿って進めていく。
	自立活動部	○ 児童生徒の実態に応じた、自立活動の適切な目標設定と指導内容の充実	○ お役立ち勉強会（自主勉強会）や自立活動情報誌「ＭＡＮＡＢＩ」等で、自立活動の指導に関する情報を定期的に提供している。 ○ 昨年度2回、今年度1回、自立活動の目標設定の手続きについての勉強会を実施した。しかし、目標設定時に十分活用されているとはまだ言えない。	○ 児童生徒の実態を的確に捉え、適切な目標設定ができるための勉強会をしている。 ○ 日々の授業実践に役立つ情報を提供している。	○ 自立活動の目標設定や指導内容の充実に関する勉強会を年２回以上実施する。 ○ とりよう夏季セミナー、自立活動研修会、お役立ち勉強会等を通じて、実践に役立つ情報を年７回提供する。	○ 新学習指導要領にある中心課題の導き方や目標設定までのプロセスについて勉強会を開催することはできた。しかし、実際に個別の指導計画の目標設定に活かされるにはまだ時間が必要である。 ○ 新たに「とりよう夏季セミナー」を開催することができた。また、着任者研修をはじめとした基礎的事項に関する研修会も改善を加えながら開催できた。	C	○ 次年度の目標設定ウィークに部員が各学部のグループ会に参加し、協力して目標設定を行う。 ○ 予定されているお役立ち勉強会を3回、自立活動通信「ＭＡＮＡＢＩ」3部発行を目標に情報提供していく。
	キャリア教育部	○ 収集した情報の発信	○「学校の一日」に事業所情報を提供し、必要な情報を閲覧できるようにしている。また、新たに収集した事業所等の情報を更新して冊子にまとめ、各学部や自立活動室入り口に設置して誰でも見られるようにしている。 ○ 人権教育や進路に関する情報提供をしているが十分ではない。	○「学校の一日」で事業所情報が最新の情報に更新されている。 ○ 人権教育とキャリア教育に関する情報が、必要な時に閲覧できるようになっている。	○ 事業所に関する情報と人権教育・キャリア教育の取り組みについての情報を更新する。 ○ 情報更新したことを周知する。	○ 夏季休業中に職員研修として東部地区にある１６事業所を訪問し、事業所の状況を把握した。事業所情報を更新し追加した。 ○ 人権教育の研修会では講義のあとグループ協議をする時間を設定し、人権について考えていることを意見交換した。	B	○ 事業所情報を更新しファイルに綴るとともに、必要に応じて保護者や担任と一緒に事業所を訪問し体験先等の相談にのるようにする。

A:十分達成（９０％以上または目標値以上）　B:おおむね達成（70～９０％未満または目標値の70～９０％未満）　C:できつつある（４０～７０％未満または目標値の４０～７０％未満）　D変化の兆し（２０％～４０％未満または目標値の２０％～４０％未満）　E：まだ不十分（２０％未満または目標値の２０％未満）

年	度	当	初			(１０)月		
評価項目		評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	到達状況	評価	改善策
３　児童生徒の健康と安全を守る【ＱＯＬの向上】	小学部	○ 体調に配慮した教室環境づくり	○ 体調を崩しやすい児童が多いので家庭との連携し、障がいに応じた環境調整を行っている。効率よく指導できるよう教室内の配置を工夫したり、児童の成長や変化に応じた机椅子等の調整したりすることが、十分ではない。	○ 効率よく指導できるよう工夫した教室内の配置が行われている。 ○ 児童の成長や変化に応じて、机椅子等の高さ等、きめ細かな調整を行っている。	○ 他の教室の様子を見あい、教室環境の改善に向けたアイディアを出す機会を年２回設定する。 ○ 児童の成長や変化に応じた机椅子等の調整ができているか、年３回確認する機会を設定する。	○ 各担任が児童の健康状態に注意し、教室環境を丁寧に整えていた。 ○ 教室環境を他クラスの教員と話し合う機会を設定していなかった。 ○ 児童の机椅子の調整については、気づいたときに調整するように心がけた。	B	○ 継続して各担任が児童の健康状態や机椅子の調整等に注意する。 ○ 感染症予防や事故防止の観点で教室環境を整える。 ○ 教室環境を他クラスの教員と話し合う機会を設定していなかった。特別に時間を設定するのではなく、日常的に情報交換できるよう工夫していく。
	中学部	○ 生徒が安心感の中でより主体的に活動できる教室環境の整備	○ 健康観察のポイントについて学部会などで共通理解を図ったが、回数が少なく、季節ごとの留意事項を伝えることができなかった。 ○ グループで話し合う場所（教室）をローテーションにしたことで、教室環境を見合う機会となり、他の教室を参考にして安全な教室環境に努めるようになってきている。	○ 季節ごとの健康のポイントを共通理解し、気づきについて報告し合うことができている。 ○ 環境の工夫について1クラス1事例環境の工夫を報告しあうことができている。	○ 年3回健康のポイントについての共通理解を図る。そのうち養護教諭から学ぶ機会を1回持つ。 ○ グループで話しあう場所をローテーションし、教室環境を見合う機会を設ける。	○ 健康のポイントについて年度当初養護教諭から学ぶ機会を持った。日々の体調の変化について速やかに養護教諭に連絡をとり対応に当たっている ○ 生徒の健康状態についての共通理解はしているが、細かい変化への対応、普段と違うことが起こった時の対応について丁寧な共通理解はまだ不十分である。 ○ 教室をローテーションしてグループの話し合いを持つことができた。教室環境については、安心安全な環境になるよう意識できている。	B	○ 環境の工夫について情報交換する機会を学部会などで持つ。 ○ 生徒の体調の変化や支援の工夫、トイレ介助、休憩中の支援など、担任以外の教員も対応できるよう情報交換を図るとともに、必要な支援が目で見てわかるようにしていく。
	高等部	○ 生徒が安心して学べる教育環境づくり	○ 年度や季節の変わり目に体調が崩れがちになったり、ストレスや不安感が増したりする傾向がある。	○ 日頃の生徒の様子を丁寧に観察したり情報交換をしたりすることで、早めに対応することができている。	○ 生徒の心身の状況を日々の健康観察等で把握し、担当間で相談したり養護教諭に相談したりして心身の健康が良好に維持できるようにする。 ○ 基本的生活習慣を身に付けるための指導を日々積み重ねていく。	○ 生徒の健康管理、環境整備など、スムーズな連携の下で対応、配慮ができていた。 ○ 基本的生活習慣を身に付けるために、生活表を活用して生徒自身が自分の生活の振り返ることができるようにしている。家庭との連携が必要であり、生徒によっては成果が十分ではない例も見られる。	B	○ 今できていることを大切に、日々の取り組みの中で生徒の健康管理や環境整備を心掛ける。 ○ 家庭と連携を取りながら、基本的生活習慣の確立を目指す。
	保健安全部	○ 児童生徒が安全で快適に学校生活を送ることができる体制づくり	○ 各種訓練、研修等を通して、教職員の安全意識の高揚、医療や障がいに関する知識の向上を図っている。 ○ 病院新築工事に伴い緊急時の病院へのアクセスの不便さが予想されるため、緊急時の対応について関係機関と連携し体制を整える必要がある。	○ 教職員が緊急時をイメージし、対応について検討・共有し、いざという時に備えている。（目標値７５%以上）	○ 各種訓練等の実施後の反省を受け、想定される事象をまとめ職員に発信していく。 ○ 教職員にアンケートをとり、目標達成度を評価する。 ○ 防災委員会、医療的ケア検討委員会等と連携し、病院新築工事に伴う環境の変化に対応した避難体制、緊急対応の見直しを行う。	○ 避難訓練、救急ウィークでの取り組みをもとに、必要な物品、体制を整理した。 ○ 教職員への目標達成度のアンケートは年度末に実施する。 ○ 病院新築工事に伴う環境の変化に対応した避難体制、緊急対応については、現在作業中である。	B	○ 避難訓練や救急・防災ウィークの反省をまとめ、必要な物品を揃える。体制を見直したもの、対応のＱ＆Ａについてまとめ職員に伝達する。
４　センター的機能を推進する【チーム鳥養の推進】	支援部	○ 地域におけるセンター的機能の充実	○ 外部からの障がいの状態に応じたさまざまな支援や就学に関する相談に対して、校内の職員の専門性を活用し、できるだけチームで対応するようにしている。 ○ 相談支援の状況や特別支援教育研修会、交流及び共同学習等、本校が取り組んでいるセンター的機能について職員への連絡白板や電子掲示板を通して報告し、周知・理解を進めている。	○ エキスパート教員や学部主事等と連携しながら、適切な支援方法の提供や就学相談を行っている。 ○ 校内の教職員が本校が取り組んでいるセンター的機能について理解している。	○ エキスパート教員等を中心として地域へのセンター的機能が果たせるよう、相談活動に出た際の補欠等校内の協力体制を仰ぐ。 ○ 掲示板や職員会等で本校が行っているセンター的機能の	○ 相談内容に応じて職員の専門性を活用し、できるだけ複数で対応をすることができた。校外へ出向いての相談だけでなく、交流及び共同学習や体験入学等での受け入れの協力体制などチームでの対応ができている。 ○ センター的機能の取り組みを職員朝会で伝え、支援部の活動が職員に伝わってきている。	B	○ 職員の専門性を発揮して地域へのセンター的機能を果たせるよう、特別支援教育研修会をはじめ、教育相談の機会提供に積極的に取り組んでいく。 ○ 引き続き全職員への報告を掲示板や職員会等でも行っていくよう努める。
	キャリア教育部	○ 学校説明会等で本校のキャリア教育の取り組みについて情報発信	○ 学校説明会、体験入学等の機会をとらえて本校のキャリア教育の取り組みについて情報が提供されている。	○ 学校説明会、体験入学等で本校のキャリア教育の取り組みについて情報提供をして、本校への理解が深まっている。	○ 本校のキャリア教育の取り組みについて参加者に理解してもらえるような資料を工夫する。 ○ 東部地区就労促進セミナーで本校教育の取り組みについて発信する。	○ 学校説明会、体験入学等の機会をとらえ、本校のキャリア教育の取り組みについて説明をした。提示資料を見直し、説明の内容を整理した。 ○ 東部地区就労促進セミナーでは、生徒が活躍できるよう見通しをもって取り組んだ。	B	○ 機会をとらえて本校のキャリア教育の取り組みを説明する。

A:十分達成（９０%以上または目標値以上）　B:おおむね達成（70～９０%未満または目標値の70～９０%未満）　C:できつつある（４０～７０%未満または目標値の４０～７０%未満）　D変化の兆し（２０%～４０%未満または目標値の２０%～４０%未満）　E：まだ不十分（２０%未満または目標値の２０%未満）